烏と梔子。

森永パピ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
烏と梔子。

【Ｎコード】
Ｎ６１０４Ｙ

【作者名】
森永パピ子

【あらすじ】
どこか遠い世界の話。戦争が終わり、三十年が経とうとしているが、水面下ではいまだ流血の争いが続いている。暗殺部隊に所属する男が思いを寄せるのは花屋で働く女。国のために戦うこと。それは彼女をも守るということ。いつか本当の平和が来ることを祈りながら、彼は戦いを選ぶ。男と女の二週間。

烏

おれに名前はありません。
おれ、親の顔は知りません。
わかりにくいですか？　すいません。
実は。

おれの生業は殺しなんです。

え？　笑いますか。そうですか。そうですよね。だって、おれたち同じ立場なんですもんね。

首切れてますよ。
あなたの首から下は後ろにあります。
意外でしたか。油断しちゃ駄目ですよ。
おれのような優男が。意外ですか？
虫も殺さないような顔ですか。
いや、蚊とかよく殺しますよ。夏に。
って、もう聞こえませんかね。そうですよね。
こんなに暗い森の中です。今夜はお月様も出ていませんね。
凍える夜ですね。すこし話したい気分なんです。
すこしお付き合いくださいませんか。

初めて仕事をしたのは十二歳でした。
おれ、これでもいわゆるエリートってヤツです。
英才教育を受けたんです。
二親も親戚もいなくなった戦災孤児から選ばれたんですよ。気づけばもう二十七です。
この国に産まれて、生きる意味は人殺しなんです。

でも、特殊な職種ですけどね、これでも国家公務員なんですよ。普段はどこにでもいる独身男です。自炊がめんどくさい時はさっさと定食屋に行きます。夏はなるべく、仕事が入ってなければ、毎日洗濯しますけど、冬は二、三日に一度ですね。家事は結構やるほうですよ。料理もね、包丁捌きはその辺の板さんより上手いですよ。嫁さんが家事下手でも大丈夫です。

でもね、仕事柄おれのような男が、嫁さんとか、あったかい家庭とか、無理じゃないですか。

刃物が身体に刺さると、すごい冷たいって知ってますか、すごく寒いんですよアレ。

おれの心の中、っていうんですか。いつもそんな感じです。

標的がどんな目に遭っていても、なんにも思わないんです。

これが普通だったんですよ。当たり前だったんです。言わずもがなですよね。

でも、困ったことに、それはちょっと違うんだなぁって最近、なんとなく思うようになったんです。

でも、言っておきますがおれは、この仕事に不満なんてないですよ。

誰かがやらなければならないことなんです。戦争はまだ終わっていませんからね。

だって、あなたもそうでしょう。あなたの死は無駄ではありません。あなたはご自分の国を、残してきた家族を守る為にここに来て、おれと戦って、運悪く命を落とした。だけど、あなたが落としたのは、命だけではなく、次世代への礎なんですから。

できれば、憎しみがないようにしていきたいとは思っているんですけど、ほら、おれたちって殺すか殺されるかじゃないですか。こんな甘いこと言ってる場合じゃないですけど、もし、おれたちの子供達がこれじゃいけないんだって互いの手を取り合ってくれたら、

本当に素晴らしいことですよね。そうして本当の和平が得られるのであれば、おれ、忘れられてもいいんです。もともと、おれたちの存在って公にされていないですから。公にされない職業でよかったですね。本当。おれそう思っています。

これ、誰にもいってないトップシークレットなんですけど、実はおれ、一人の女性がとっても気になっているんです。

おれ、国の一番大きな都市に住んでいるんですけど、首都って言った方がわかりやすいですね。あなたも知っているでしょう。あそこです。あそこは同じように戦争で親や親類を亡くした人たちがけっこう多いんですけど、みんな復興も進んで前向きで活気があってなかなか賑やかでしょ？　道端には楽器を持って演奏してくれる人もいるし、ずいぶん市場も充実しているし。その市場の近くに花屋があるんです。慰霊碑に献花しに行くでしょう。おかみさんとは顔なじみなんですけど、最近そこに女の子が働いているんです。もうおわかりでしょう？　おれ、その子のことがきになっているんです。とっても笑顔が素敵な子なんですよ。血で汚れた服が気になって、洗濯しても、新しい支給服を着てっちゃうくらい、その花屋に行く時は気合入れちゃうんですよ。滑稽ですよね。自分でも思います。

「先輩。なに首相手に笑っているんですか。死者に失礼ですよ」
「なんだセカンドか。任務中に先輩って言っちゃダメでしょ」
「すみません、……隊長。任務完了しました。撤収のご命令を」
「うん。じゃあ、帰ろうか。皆は？」
「全員、とりあえず生きてます。重傷を負ったのは、ファイヴ、セブン、以上二名。すでに救護班により搬送されました」
「そっか。頑張らせすぎたね。セカンドは大丈夫？」
「ご覧の通りです」
短い黒髪に黒い眼。細身だが筋肉質な体躯。殺気が失せると好青年としか形容しようのない彼は、上司に軽く微笑んで見せた。

四つ歳下の彼は本が好きで、様々な分野の書物を所有している。任務のない時は国立図書館に入り浸り、副業として職員も勤めている。気になる書物があれば書棚整理の仕事も忘れ没頭してしまうのが悪い癖だが、礼儀正しく柔和な物腰の彼を非難するものはいない。

暗殺部隊の職員は皆副業を持っている。しかし隊長である彼はそれを許されていない。任務がない日は身体を休めるか鍛えるかあるいは作戦会議に出席している。隊長に任命される前に一度小学校の教諭に志願したが、受理されることはなかった。そのかわり暗殺部隊の精鋭たちが慰安隊に産んでもらった子供達の鍛錬を担当させられた。

一定の能力を認められた隊員たちは避妊具をつけずに慰安隊とまぐわうことが許される。懐妊した女達はそこで部隊から外され子育てに専念する。その後は国から住まいと援助金を支給される。シングルマザーも珍しくなく、彼女たちの為のコミュニティーがあり、国からの名誉勲章を授けられるため誹謗の的になることはない。

慰安隊員たちは相手を選ぶ権利があり、いくら他の男達が望んでも身体を許す必要はない。そうして生まれた子供達は三歳になると適性検査を受け次世代の暗殺隊員として教育される。

不適切な場合でも記憶を消去され一般市民としての生活を送ることになるだけだ。そして多くの母親たちはそれを望んでいる。暗殺部隊になる子供たちは五歳になると親元を離され、訓練校に入学させられる。訓練校に入ると全寮制ではあるが最低限の自由と長期休暇が許され、小遣いにしては高額な給料も支給される。そして十二歳になると最終試験と尋問が行われ、最終判断は本人に任される。しかし実際ここまで残る子供達は当初の十分の一まで減少する。

太い枝を足場に森を抜ける。特殊な素材で出来た靴は物音一つ立てさせない。

このまま無事、国にたどり着けば彼らには二週間の休暇が与えられる。国境にたどり着くまで一切気は抜けない。聳え立つ鉄門をく

ぐるまで誰一人として声を発するものはいなかった。

梔子◆一日目

朝夕の身を刺す寒さが嘘のように、日中の陽射しは暖かい。物陰に入ればやはり風は冷たいが、陽があたる場所では冬を忘れる暖かさだ。

蛇口からでる水は骨の芯から痺れるほど冷たいが、使えるだけ有り難い。花筒の水を入れ替え、傷みはじめたものを抜いていく。ミニブーケにしてディスプレイにしたり客にオマケと言ってプレゼントすると喜んでもらえる。売り物としては駄目でも、人を喜ばせられる花を誇らしく思う。

赤いマーガレットとピンクのバラで小さなブーケを作っている彼女の名前はマシロ。あと二週間で十八になる。元国家公務慰安隊員の母親と二人で暮らしており、父親は戦死したと聞いている。マシロの住む界隈では周りの子供達も同じように母子家庭が多く、皆で助け合って生きてきた。

十二歳の時に国から通達が届き母親に役所へ連れられた。近寄りがたい難しい顔をした制服の大人たちは書類と彼女を見比べながら、簡潔に十八歳になったら慰安隊に入隊することができるが、入るか入らないかは本人の希望に任せると云った。小さな頃からそれとなく母親に教えられてきたことだったのでマシロはその場で承諾した。破瓜の儀式は相手を選ぶことが許されているし、最も重要な任務の伽も選択権がある。何より国のために働いている隊員たちの役に立てるものならいいと信じていたからだった。

慰安隊の任務内容の殆どが隊員たちの身の回りの雑用で、その中で好意を持った相手と寝所を共にすることになる。母親の話によると中には一人で三人の慰安隊を相手にしなければならない者もいたらしい。マシロの父親は三年間の任務の中で数十人の慰安隊と子を成したが、最期の六ヶ月だけは母親とだけ過ごしたのだという。慰

安隊を拒むことは特級階の隊員だけに許された最後の恩赦だということも聞かされた。一部の元慰安隊に陰湿な嫌がらせを受けたことがあったのはそのせいだったのかと思った。

しかし、最近マシロには十二歳の選択を鈍らせる相手が出来た。向いの魚屋の息子で小学校の教員をしているトビヲだ。トビヲは容姿こそ凡庸だが、いつも子供達に囲まれ向日葵のような明るい笑顔で接している。花屋の朝ももちろん早い。出勤時のトビヲはマシロを見かけると同様の笑顔で挨拶をしてくれる。学校の行事で花が必要な時はトビヲが出向いて注文してくれたりもする。マシロも帰りにその魚屋で夕飯の買い物をし、運がよければ彼が店先にいることもあった。今日は小学校の社会科見学で工業地帯にいっているらしい。早朝の出勤時にトビヲが今日の社会科見学が楽しみで昨夜はなかなか寝付けなかったのだと照れ笑いを浮かべて話してくれた。彼の笑顔を見ると胸が熱くなった。言葉をかわすのは少しの緊張を催したが、男にしては柔らかい声がとても心地いい。

今朝の短い逢瀬を思い返していると手が止まっていた。目を閉じていたせいか、すぐ傍に人がいるのにも気づかなかった。

「こんにちは」

低くかすれたような声で、長身の男が軽い会釈をした。

「こ、こんにちは。すみません。ボーっとしていました。今日もいつもの花束でいいですか」

「はい」

不定期にだが、月に数回訪れる常連だった。マシロと名づけられた自分よりも色素の薄い肌。長めの髪の毛は銀色で左目に眼帯をしている。額から右斜めに顎まで走った傷跡を差し引いても端整な顔立ちをしているが、唯一見ることのできる赤茶色の右目はいつも眠そうな重い瞼で、生気が感じられない。

彼は国から支給されるタートルネックのニットタイプの特殊服を着ている。おそらく穿いているものも同様のものだろう。一般人風

だが、間違いなく特殊部隊員だ。一枚だけ残っていた写真の中の父親も、形は違えど同じタイプの服を着ていた。母親も同じ物を持っているので知っている。一見ブランドロゴに見える胸に刺繍された獅子のマークがその証拠だ。

しかし、彼はいつもここで白い花を買っていく。街から外れたところにある慰霊碑に献花しているのだとおかみさんから聞いていた。悪い人ではなさそうだけど。マシロはちらりと男をみた。目が合い、無感情に逸らされた。マシロはこの異様な風貌の男が苦手だった。

「あの慰霊碑にですか」

接客だと言い聞かせながらマシロは思い切って話しかける。

「はい。あそこには両親が眠っています」

「そうですか。私の父はその先の丘の上にいます。戦争で活躍したらしいです」

そういうと男の表情が一瞬揺らいだように見えた。真っ白な百合と八重先の雪洞菊をふんだんに重ね包装紙に包む。男は作業中ずっとマシロの手を見つめていたが、ふと声を発した。

「あの奥にあるのは、梔子ですか」

「あ、はい。珍しいでしょう。品種改良されたものらしくて昨日入荷したんです。こんな寒い時期に花が可哀想、あ。今のおかみさんには内緒ですよ。売り子なのにこんなこと言ったのばれたら怒られちゃいますから。でも、きれいな花ですよね。香りもとってもいいし、私も梔子好きなんです。花言葉が私はとても幸せとか、優雅とか洗練とか、清潔とか、あ、喜びを運ぶって言うのもあります！よかったらお一ついかがですか？　幸せを運んでもらえるかも！なーんちゃって」

マシロはにこにこ笑いながら、男を見上げる。

「じゃあ、あれもください」

「へっ？　あ、ごめんなさい！　押し売りじゃないですよ！？　ちょっと冗談のつもりで」

あたふたと男に向けて両手を振る。男は幽かに笑った。よく見て

いなければわからないほどの微笑みだったが、たしかに見えた。一番最初の雪の一片のように消えていった。

「いいんです。あれ、ください。そして贈り物用に包んでください」

静かな、揺るぎない低音にマシロは頷かざるを得ない。どういう色の包み紙がいいか尋ねると、おまかせしますと返ってきた。

マシロはちょっと考えて暖かいオレンジと黄色のふわりとした紙で鉢を包み、濃いオレンジのリボンをつけた。寒々しい鉢に陽だまりのような明るさを添えてやりたかった。

「いかがですか？　あ。メッセージカードお付けします？」

「いいえ。名前がわからないので結構です」

妙な答えに疑問を抱いたが、特に気に留めないようにして手に取ったメッセージカードを作業台においた。

「はい。わかりました。ではお会計が七千五百還になります」

男は会計を済ませると、白い花束と暖色系の鉢を両手に抱え、じっとしていた。

白い花束だけを見ると雪の使者のように儚げに見える。隣の鉢を見ると少しはその寂しげな佇まいが柔らかくなった。

マシロの男に対する苦手意識は薄れ、これからはもう少しちゃんと接客しなきゃと反省した。

しかし、彼は動く気配がない。首を傾げてみせると、鉢植えが目の前に差し出された。

「え。あの、お気に召しませんでしたか？」

無言で突っ返すなんて。少々腹立たしさと不安を覚えて男の右目を見た。

「……あなたに……、その、幸運が訪れるように。どうぞ」

男はそっぽを向く。マシロは一瞬何を言われているのかわからなくなったが、顔が赤くなるのがわかった。驚きのあまり心臓が活発に動き出す。

「え？　わ、私に、ですか？」

「……ご迷惑でしたら、また元の位置に戻して置いてください。そ

れでは」
　ぐいっと手元に押し付けられ、否応なしに受け取る形になった。男はすでに背を向け店の外に出て行った。とにかく鉢を台の上に置いて、まだ作りかけだった赤いブーケを手に取った。急いでピンク色の紙を巻き、ボルドーのリボンを巻く。
「ちょっと待ってください！」
　店頭に飛び出して叫ぶと、男は人ごみに消えそうなほど離れたところにいたがマシロの声にちゃんと反応して振り向いていた。男の許にかけより小さなブーケを差し出す。
「これ、もう売り物にはならないんですが、貰ってください」
　男は瞠目して小さなブーケとマシロを見下ろす。
「い、いっぱい花をお買い上げいただいたので、サービスです」
　何をしているのかと恥ずかしくなって適当な言い訳をしたが、まともに男を見ることができない。
「……赤は、苦手なんです」
　小さく呟いて、そっとブーケに手を伸ばして、指先で花びらにふれる。
「あ、そ、そうですか……。すみません」
　気まずく思いながらブーケを引っ込めようとすると、手ごと握られた。
「でも、あなたがくれるなら嬉しいです。あなたに贈ったはずの梔子なのに、おれにも喜びを運んでくれた」
　するりとブーケを受け取り、鼻の近くに寄せた。
「ありがとうございます」
　なにが起こっているのか理解できないと言わんばかりに硬直しているマシロを置いて男は再び歩き出した。
「……な、なに、今の。キザ、へ、変な人。なんなの？」
　どくどくと胸を打つ心音を誤魔化すように小さな声で悪態をついた。彼の手は、水仕事をしていた自分よりも冷たかった。赤とピンクの花を手にするとやけに映えた。

「ちゃんと防寒すればいいのに」
体温が上昇したせいか北風が身に染みる。先ほど見たすこし丸まった男の背中が脳裏に過った。
「あー、いけない。店番店番！」
振り払うように頭を振り、小走りで店に戻った。
作業台の上の暖かそうな包装紙をまとった梔子を抱える。三千還もする決して安くない代物だ。
「せっかく貰ったんだもの。大事にしなくちゃ」
生まれて初めて自分に贈られた花。贈る人ばかりを見てきたが、いざ贈られると素直に嬉しかった。
赤は苦手だと言っていたが、受け取ってくれた彼も同じ気持ちなのだろうかと思うと、さらに気持ちが弾んだ。次に来てくれた時はちゃんとお礼を言わなくちゃ。鉢を抱いて小さく笑った。

烏◆一日目

帰国して任務完了の報告に向った官長室で早々に二週間後の任務の説明をされた。敵対国の国防長官の暗殺。期間は三年。五人一組が一部隊として派遣する潜伏任務で、六部隊の人員構成がすでに任命されていた。残りの五部隊は、万が一、初期投入部隊が全滅した場合のための補充部隊だった。

各部隊には精鋭が二名、中級隊員が三名選ばれており、セカンド呼んだ青年と再び同じ部隊だった。

彼は余計な犠牲を出さないようにと自分の部隊を初期投入部隊に願い出たが、長官は承諾を渋った。

彼は世界最高の戦闘力を持ち、また破魔眼の持ち主だ。眼帯は破魔眼抑制装置の役割を担ってる。

破魔眼には、見たものの殺気や恐怖を具体的なイメージとしてみせる幻覚術と金縛り、あるいは破魔眼を持つものの想像を具現化して死に至らしめる力がある。催眠術を発生させる能力であることは最近わかってきたがそれ以上の解明には追いついていない。この術を発動させるには膨大な精神力と体力を消費するので使いすぎると死に至る可能性があるらしい。訓練中に二度死にかけた。

最終手段として使用する為、必然的に彼は体術や火器砲術など様々な訓練を受けている。幼い頃には破魔眼の能力をコントロールする方法として化学療法も受けていた。そのほか、様々な耐毒性をつけるための訓練も重なり、副作用により色素が人よりも薄れていた。繁殖力も通常より随分劣っており、精通して以来何人もの女と性行為を行ってきたが未だ子を成していない。

上層部や部隊ではそのままハマやアカメと呼ばれているが戦災孤児のため本名がない。両親は不明で生き残っている可能性はゼロに等しい。

アカメが条件を飲まなければ出動しないというと長官は渋々承諾

印を押した。

最後の二週間になるかもしれないと思った彼は花屋に通おうと考えた。

少しだけでいい。彼女の記憶に自分の存在が残れば、今回の任務で死んでも悔いはない。

たとえ、彼女が他の男に思いを寄せていても構わなかった。彼女がその相手と平和な国で家庭を築き、家族と笑っている。想像すると冷え切った胸の中がじんわりと暖かくなった。あの笑顔が消えないように、そしてあの笑顔と同じような顔でこの国の子供達が笑うのなら、どんなに素敵だろうかと思う。

自然と緩んでしまう顔のまま防衛庁館内の廊下を歩いていると出入り口の付近で立っていたセカンドに呼び止められた。

「先輩、飯食いに行きませんか？」

訓練施設でずっと一緒だった彼には元慰安部隊の母親がいる。本名はタイラという。タイラはアカメに懐いており兄のように慕ってくる。家族のいないアカメとしては彼の存在は貴重だった。人間らしい精神環境を整えられたのも彼の存在があったからこそだ。

「いいよ。タイラはなに食いたい？」

「そりゃもちろん、ウラワ食堂の塩焼き定食、白飯味噌汁大盛りです。先輩は？」

「煮魚定食、白飯豚汁大盛りだねえ」

顔を見合わせて口元で笑いあう。

ウラワ食堂は元暗殺部隊の主人と元慰安隊の女将が二人で切り盛りしている。営業時間は夕方七時から朝の七時までの隊員御用達の店だ。

二十名も入ればいっぱいになる店内の壁一面には来店客の写真が所狭しと貼られている。中には帰らぬ人となった隊員もいるが、大体が見知った顔ぶれだ。

例に漏れずアカメもタイラも任務開けには必ず寄る。

タイラがこれぞおふくろの味と言ったので、アカメもそうだと思っている。確かに施設や慰安会で食べるどの料理よりも美味しい。

他の客も関係者と常連客のみで、唯一自宅や寮以外で彼らが安息を得る場所となっている。

「今度の任務かなり長期戦ですね」

ウラワ食堂の座敷席に着くなりタイラが沈んだ口調で言った。

「あっちの国の図書館読破しちゃえば？　タイラならできるよ。速読と暗記が得意なんだから、子供達にいろんな物事教えてあげなよ」

「ははっ、そうですね……、はい……」

なんとも歯切れが悪い。今回の任務の重さを憂いているに違いない。

「おれたち全滅したことないでしょ。全員帰還がアカメタイラ部隊の自慢だよ？」

ぽんぽんと肩を叩いてやると、いくらか表情を柔らかくした。

「ええ。なにがあっても隊員たちは帰還させましょうね」

「うん。タイラもね、帰還しなきゃダメだよ」

タイラは自分がどうなろうとも他の隊員たちの帰還を優先させるつもりだ。それはアカメも同じで自分が死んでもタイラと他の隊員は帰還させたいと思っている。

アカメに家族はいないが、タイラや他の隊員にはいる。彼らを悲しませるようなことはしたくない。

「先輩も帰ってくれなきゃ困るんですよ。いくらモテるからってあっちの色街とかにはまらないで下さいよ」

「なーいない。おれがアッチ弱いの知ってるでしょーよ」

ゲラゲラ笑いあって不穏な気持ちを一蹴する。そのうち定食も運ばれ、久しぶりの暖かい食事に舌鼓を打つ。

食事を済ませた頃にはすでに八時になろうとしていた。営業時間が押しても、主と女将は笑顔で見送ってくれる。

「またおいで」というのは、一種の願掛けのような、祈りの言葉のようなもので、皆「またくるよ」と返す。そうすると不思議とまた

帰ってこれるような気持ちになる。帰らぬ隊員たちも今来ている隊員たちも同じように挨拶をしてきた。前線を離れてもまだ辛い思いをしている二人を見ているとアカメもタイラも早く本当の意味での安息を取り戻さなければと奮起した。

途中の十字路でタイラと別れ、アカメは一人市場に向う。冬の空は格別に澄んだ色をしている。鮮やかな青に流れる雲を見上げると、昨夜の暗い森が同じ世界だったのかと疑いたくなるほど眩しかった。

慰霊碑は街から二キロほど離れた場所にある。見晴らしが良く海と街が見渡せる。かつてこの土地に溢れた戦死者はこの場所に搬送されそのまま埋葬された。戦闘隊員の中でも階級の高いものはすこし先の小高い丘に入れられた。

今はまだだだっ広いだけのこの場所も三月頃に始まり五月頃には一面がネモフィラという瑠璃色の花で埋め尽くされる。ネモフィラは耐寒性の一年草でこぼれ種で増えていく。次から次へと新しい花が咲き、いつの間にかこの地を埋め尽くしてきた。それは人の営みと似ている。この国が、各国の人々が繋がり合い、美しい世界を作る。地面の下で悲劇が続いていたとしても、絶望を乗り越えて、糧として美しい花が咲く。そうであればいいと思った。

アカメは今朝彼女に貰った小さな花束を片手に持ったまま自分よりもはるかに高い慰霊碑にびっしりと刻まれた名前を目で追う。もちろん両親の名前は知らない。献花台に包んでもらった白い花束をそっとそえ、これから先自分のような子供が増えることがないようにと黙祷する。

返り血を浴びるたび、その温みに驚く。フラッシュバックするその映像を冷静に受け止めた。

ああ、また悲しみの種が、憎しみの種が、落ちていく。彼女の笑顔を守ることは、他の誰かの笑顔が消えていくことと同じなのだろ

う。

そう思いながらも、殺戮をやめられない。守りたいと思うのは、やはり、彼女と身近な人であり、自分にできるのはとても狭い範囲に限られている。その思いが少しでも広がるように、身近な人たちに伝えることしかできない。タイラには早く除隊して学校の先生にでもなってもらいたいというのだが、彼はアカメが前線にいる限りそれはできないといった。身勝手なのはお互い様で、アカメはそれ以上なにも言えなくなる。

つるりと表面を研磨された慰霊碑を夕暮れまで眺め続けた。死んでいった部下や殺してきた敵部隊の一人一人の顔を思い浮かべた。十五年の月日はあまりにも長すぎた。

夕闇が迫る市場は夕飯の買い物に来ている人で賑わっていた。花屋の前を通っていこうと遠回りをして歩いた。彼女を食事に誘ってみようと思いついたからだ。

花屋の入り口の硝子扉から中をのぞくと先客がいた。彼女と親しげに談笑している青年。魚屋で何度か見かけたことがある。彼女は両手に長方形の箱を持って顔を上気させている。

手に持ったままの小さなブーケのピンク色の花のような頬だった。花と彼女を見比べていると、青年が出てきた。アカメはさらりと身を翻し建物の陰に身を潜めた。青年はアカメに気づかず、すこし離れた場所に待っていた女のところに駆け寄っていった。

「渡せた？」

白いマフラーに顎を埋めながら彼を見上げる小柄な女。

「うん。おまたせ。店番の子しかいなかったけど、一応お土産渡してきたよ。さ、なに食べる？」

二人は手を繋いで身を寄せ合うように歩いていった。アカメが物陰から出ると、彼女が看板を抱えたまま立ち尽くしていた。

「あなたそんなところでなにやってるんですか？」

彼女はアカメを見るなり尖った声で怪訝そうに目を細めた。

「あ、いえ。べつに」
うまい言い訳など考えつく余裕がなかった。困難な状況ほど無表情になる。彼女を目の当たりにするとひどく緊張してしまい、まったく言葉が出てこなくなった。しかし、自分の中のタイムリミットは限られている。後退している暇などない。
「店じまいですか」
「はい。あ、あの、今朝は梔子ありがとうございました」
ぶっきらぼうに頭を下げられ、アカメも頭を下げた。
「こちらこそ。素敵な花束をいただいて」
「どうせ売れ残りです。気にしないで下さい」
彼女は素っ気なく言うと抱えた看板を抱くようにして店に入ろうとした。
「あの、飯でも食いに行きませんか」
「家で母が待っています。今日はすぐに帰ると言ったので無理です。ごめんなさい」
再び背を向けられ、思わず肩を掴んだ。
「じゃあ、明日。明日の朝はお母さんにご飯食べてくるっていってから家を出てください」
「どうしてあなたにそんなこと決められなくちゃいけないんですか」
むっと唇を尖らせて彼女はアカメを睨む。
「おれにはあまり時間がないんです。だから、お願いします。二週間だけでいいんです。あなたと時間を共有したい」
「私、あなたのこと知りません。知らない人に突然そんなお願いされても困ります」
「……そうですか。わかりました……。明日また出直してきます」
食事を断られたとはいえ彼女に会えれば時間の共有になる。そして最悪でも最終日に食事に誘おうと決めた。十日以上顔をあわせれば顔見知りくらいには認識されるだろう。
あっさり引き下がったようでまた明日くると言った男を不可解に思いながら、マシロは看板を店内に運んだ。

思いを寄せていたトビヲに恋人がいたのはショックだったが、さっきの妙な男のおかげでうやむやになった。あのまま一人だったら泣いていたかもしれない。痛くなった目頭は別の驚きのせいで涙を出し損ねた。

「ほんと、変な人だ」

絶妙なタイミングで現われた変人のせいでつい吹きだしてしまった。

梔子◆一日目・夜

市場から慰霊碑の丘方面に歩き、林の手前で右に曲がると、元慰安隊員たちの住宅街がある。

花屋で働くようになって四ヶ月。惣菜屋と弁当屋、総合食材小売店などの面接を受けたがことごとく落ちてようやく合格した。落とされた原因に彼女の出身地が関係していることなどマシロは知る由もない。

十五歳まで普通の学校に通い、慰安隊志願者は二年間専用の訓練校に編入する。護身術と野外戦の基本、裁縫や料理を学ぶ。そして十七歳から十八歳になるまでの一年間は自由に過ごす。ほとんどの少女たちはこの一年間で志願を取下げていく。

現在、慰安隊員制度は存在しているものの、専用訓練校は花嫁学校として認識されつつある。規制はないに等しい。国勢が安定してきた昨今、その風習は悪習とみなされ制度自体をなくす運動が高まっている。

マシロの母親も一切干渉はしてこない。時代は変わっている。女子隊員は賄いだけではなく、諜報部員や連絡情報処理部員として活躍してしていると聞いている。その反面、元慰安隊員が戦闘員用の娼婦ではないのかと言い出す口さがない一般人がいることも知っていた。口にはしないが娘が心変わりして普通の女として生きていくのを選んでも、賛同しようと思っていた。

「あら、どうしたの。こんな時期に梔子？」

母子にはすこし広い平屋建ての引き戸を開けてただいまと言うと、暖かい空気と共に顔を出した母親が、娘の顔と梔子を見るなりそう言った。その顔はすぐにからかうような笑みに変わった。

「お店の新商品。ちょっと変な人がくれたの」

「へーえ。なにその変な人って、男の人？」

ブーツを脱ぐ為に腰かけている娘の肩に覆いかぶさるようにして顔を覗き込んでくる。
「ふっふーん。そりゃあ私だってお年頃ですから、そんな殿方も現われますよーだ」
鼻に皺を寄せ満面の笑顔で返す。
「あらら。若いって自信過剰ねえ。ま、あなたは自分の身は自分で守れるから心配しないけど、変な人っていうのは気になるわ。どんな人なの？」
「すっごい白髪で眼帯つけてて額から顎のところにかけて傷があるの。無表情で片方は眠たそうな目してる」
マシロの大雑把な説明に母親は顔をしかめて考えるように数秒黙り込んだ。
「……元兵隊のおじいちゃん？」
「ちっがうよ！　私より年上っぽいけどお母さんより若いもんね！　でもね、その人特殊部隊員の服きてた。もう、お母さん重いよぉ。どいて」
母親を柔らかく押し返して振り向くと、呆然と見つめられていた。
「マシロ……」
「どうしたの？」
「その人、ヤバいよ」
「えっ……？」
ガバッと抱きしめられ、一気に不安が押し寄せた。もしかしたら本当の意味で危ない人なのかもしれないと、背中に冷たいものが走った。
「その人、すごい人だよ。ヤバいよ超高めの男だよ。マシロ玉の輿いぃい」
ぎゅうぎゅうと抱きしめられ、マシロは「ギブギブ」と繰り返す。
「っていうかお母さんまぎらわしいよ！　マジでヤバい人かと思っちゃったじゃない！　若者言葉禁止！」
母親を引き離し、きれいな鼻梁に人差し指をぶつけた。

「えっへへ、ごめんね。でも、その人」
母親は目を伏せて声をひそめた。
「……間違いなく暗殺部隊の人だよ」
いまだ国の役所に臨時職員として事務のパートに出ている母親にも、銀髪のアカメの噂は聞こえていた。
「……やっぱり、そうだよね」
マシロも額をぶつけて呟いた。
「あのねお母さん。私ね、今日失恋したんだ。向かいの魚屋さんの息子さん、小学校の先生してる人、知ってるでしょ？」
「うん。知ってるよ。マシロ、最近彼の話ばっかりだったもん。ねえねえ今日はシチューだよ。玄関は寒いから早く炬燵いこ。話ならそっちでゆっくり聞くから、手ぇ洗っといで」
「うん」
優しい母親の笑顔にマシロも小さく笑い返す。
母親は先に奥の部屋へ行く。ブーツを靴箱にしまってマシロは洗面所に向かう。
手を洗い、うがいをしながら銀髪の男を思い浮かべる。
氷のように冷たかった。あの手で人を殺してきたのだろうと想像したが、いまいちピンとこなかった。
部屋に入るとシチューと蒸し鶏と大根のサラダとご飯が用意されていた。水で冷え切った手をすり合わせながら、炬燵に入る。
「うー、寒い寒い。いただきまーす」
手を合わせると、母親もいただきますと茶碗を持つ。
「で。マシロちゃんの失恋話は？」
「ああ、そうそう。その魚屋さんのトビヲさんって言うんだけど、今日学校で社会科見学があってね、おかみさんにお土産持ってきてくれたの。恋人を外に待たせて。看板しまいに行ったら、二人が手繋いで歩いていくところを目撃しちゃった。以上」
「え。それ簡潔すぎるんじゃない？　もっと打ちひしがれた乙女の恋心とかないのー？」

「だって、その白髪の人が建物の間から出てくるんだもの。びっくりしちゃったよ。んで、なにいうかと思えば食事に行こうって。朝一で人にラッピングさせたかと思うとそれくれるし。だいたいさー、贈る相手にラッピングさせる？　普通は別のトコで買ってきて渡すでしょ」

「でもマシロ好きじゃん。梔子」

「そ、そりゃ好きな花だけど、催促したわけじゃないよ？　あっちが先にこれに気づいて、ちょっと花言葉とか説明しただけ。冗談で勧めたら買うって言って、それでくれたの」

「へー。いい人じゃん。なんで食事いかなかったの？　美味しいものご馳走してくれたかもしれないのに」

「だって今朝早く帰るっていったじゃん。それに、お母さんシチュー作るって言ってたし」

「やだー可愛い娘。お母さん泣きそーう」

茶碗を置いて、両手で口元を押さえる。台詞のわりに口調が軽い。

マシロはわざと冷ややかな目で母親を睨んでご飯を口に運ぶ。

「せっかくの素敵なお誘いなのにもったいないなあ。なんで断っちゃうのよう」

「明日も来るって言ってたよ」

つい口を滑らすと、母親がまた口元に両手をやり、いかがわしい目をした。

「明日、お母さんご飯外で食べてきちゃう」

「変な気使わないで！」

「いいじゃない。行ってきなさいよ。せっかく失恋したんだから次いきなよ次。若いんだから」

「普通、娘にそんなこと進める？」

呆れて言うと母親はさらりと答える。

「だって、そんなに性急にアプローチしてくるって事はさ。その人、なりふり構ってらんないんじゃない？　食事くらいいいじゃない」

冗談を言っていた顔とは打って変わって静かな声で、マシロをみ

る。
「そんな簡単に……。もし食事だけじゃ済まなかったらどうするのよっ！」
「それは貴女次第。それにきっと無理強いするような人じゃないわよ。ああいう人たちは国から管理されてるんだから。それにいつ死ぬかわからない状況にいるんだよ。貴女だって知っているでしょう」
母親の言葉に、絶句した。いくらもう少しで入隊するとはいえ自分には戦争が続いているという実感がない。心のどこかでもう何十年前の話だと高を括っていた。
「別に最後まで致してこいって言ってるわけじゃないよ？　おーいマシロちゃーん」
母親の明るい声も虚しく、箸を置いてマシロはうつむく。
彼は一般民とは置かれている状況が違う。わかっているつもりだったのに、そう無言のまま言い訳したが、胸が痛んだ。そして、このまま入隊するべきなのか新たな迷いが浮かぶ。いつ死ぬかもわからない隊員たちの傍に行くということが、どれほど厳しい環境なのかまともに考えたことがなかった。だから、彼に対してあんな傲慢な態度に出たのだ。
「でも、だからってホイホイ身体を許しちゃうようなふしだらな娘に育った覚えはないんだからね！！」
「わかってるよ」
母親はくすくすと笑いながら、手を伸ばしてマシロの頭をなでる。
「ちなみに言っとくけど、白髪じゃなくて銀髪。彼は国家公務員の中でもずば抜けたエリートなんだよ。粗相のないようにね」
「テーブルマナーなら学校で仕込まれたもん。お母さんより大丈夫だもんね！」
「なーによ。ＯＧを愚弄する気？　戦場の貴婦人と呼ばれたのはアタシだよ？」
「嘘ばっかりー。顔に傷つくってなにが貴婦人ですか」
「だから、戦場の、っていってるじゃない」

「はいはい。ご飯冷めちゃうよー。早く食べよう」
再び箸を持ってご飯に集中する。無邪気な娘の様子を見つめながら、母親は寂しげに微笑んだ。

烏◆二日目

昨夜は小さな花束を見つめて夜を明かした。切花は水を張った瓶に差しておかなければならないことを知らず、ゆっくりと萎びていく花を見ていた。

はりのあった花びらが皺を寄せ黒っぽく変色してくったりと首を下げていく。その遅さは死にかけていく人の呼吸の間隔と間隔の合間にある長い空白に似ていた。

花びらが落ちた時、――息を引き取る時の、生が途切れる一瞬。刹那の音が聞える――、その音を思い出した。彼女がくれた贈り物の死を見届け、付随する記憶を辿って、顔を上げたときにはもう朝だった。

困った、とアカメは思った。今回の休養は時間の無駄が多い。せっかく彼女と話せたのに会えない時間が多い。名前もまだ知らない。今日は彼女の名前を聞こう。

そうして、着ていた服に手をかけてふと気づいた。着替えるのを忘れたまま彼女に会いにいってしまった。アカメにとって、それはとんだ失態だった。標的から離れていたとはいえ、飛沫のついた服のままだった。服を脱ぎ捨て浴室へ急ぐ。シャワーを全開にして頭からつま先まで力を込めてこすった。

花屋の前に着いたのは正午近く。

浴室から出て着替えているとタイラが尋ねてきた。彼は母親が作って待っていたという大きなミートパイを持参していた。彼の母親は鯵の塩焼きより、アサリの出汁のきいた白ワイン仕立てのアイナメのアクアパッツアを作る。美味いんですけどね、とタイラは困ったような微笑を浮かべた。

アカメと小さな食卓に向かい合って、数種類の野菜が入ったミネ

ストローネよりあおさの味噌汁のほうが舌馴染みがいいんですよ、とこぼしてミートパイを口に運んだ。アカメが、美味いな。というと、よかったら全部食べちゃってください、と申し訳なさそうに微笑んだ。

まだ半分残っているミートパイが入った白い箱を見やり、開け放している花屋のドアを見た。

その向こうで彼女は一人で花に囲まれていた。床にしゃがんで背を向けるようにしてなにか作業しているようだった。アカメは店内に入る。普段から足音を立てないので彼女はアカメに気づいていない。

背後に立ってようやく落ちた影に気づいて、尻尾を踏まれた猫のような声をあげた。

「なんであなたはそう神出鬼没なんですか?!」

尻餅をついた彼女はアカメを睨むように見上げ、威嚇するような剣幕で言う。

「ドアが開いていたから、入ってきただけです。それよりミートパイ食べませんか」

怒らせるつもりなど毛頭ないのに、彼女は口を尖らせる。

「全然人の話きいてないんだから」

と口の中でぼやきながら立ち上がり、長いスカートの後ろを叩く。

「ミートパイ、食べませんか」

白い箱をぐいっと差し出すと、とりあえず受け取ってもらえた。

「せっかくなのでいただきます。おかみさんがもうすぐ帰ってくると思うので伝えておきます」

「おかみさんじゃなくてあなたに持ってきたんです。伝える必要なんてありません。召し上がってください」

彼女は小鹿のような黒い瞳で白い箱を凝視する。

「で、でも。私まだ休憩時間じゃないので、まだ食べません。仕事も残っていますから」

「もうお昼ですよ。だいたいこの時間帯が昼食じゃないんですか？」
「お昼の時間がずれ込むのはよくあることです。今すぐ食べなくても飢え死にはし……」
ぐっと唇をすぼませて黙り込む。すこし俯く彼女を見てアカメは困惑した。
「ミートパイ、嫌いでしたか？」
「いえ、そうじゃないです。違います。食べたことないですけど……」
「美味しいです。後輩の母親が作ってくれたものなんです。味は保証しますよ」
「では、仕事が一段落したらいただきますね」
箱を台の上に置いて蓋を開ける。顔を近づけ匂いをかぐと小声で感嘆を上げた。
「いい匂い。お腹空いてきちゃいました」
「食べればいいのに」
アカメは箱から一切れパイを取り彼女の口元に持っていく。ラザニア風のミートパイからチーズがこぼれそうになり反射的にかぶりつく。
彼女はさっと顔を赤らめて一口分噛み切ると口を押さえて背中を向けた。
「美味いでしょ」
アカメは同意を求め、残りのパイを自分の口に押し込む。
「ん、んん……おいしいです……」
背を向けたまま何度も首を縦に振る。
アカメはパイを飲み込み、指についた肉汁をなめとって手を叩く。
「あ。おれ、あなたの名前が知りたいんですけど、教えてくれませんかね」
こっちの都合はお構いなしで話を進めていく銀髪男に文句の一つもいってやりたいところだが、昨夜の母親との話もあり、パイと一緒に飲み下す。口元を拭って、男に向き直った。

「……マシロです。ユキサトマシロ」
「ユキサト・マシロ。きれいな名前ですね。おれはアカメとかハマと呼ばれてます。呼びやすいように呼んでください」
さらりと褒められ、マシロは気恥ずかしくなったが当の本人は微塵も気にしていない。
「……ハマ・アカメさんっていうんですか？」
「いえ、ただそう呼ばれてます。親がいないので本当の名前がわかりません。だいたいアカメと呼ばれることが多いですね。ほら、おれ、目が赤いので」
アカメは黒革の眼帯を当てた左目を指差す。
「こっちの方はもっと赤いです。事情があってお見せできませんけど」
「ごめんなさい……」
言わせてはいけないことを言わせてしまったかもしれないと申し訳なくなり、マシロは頭を下げた。
「どうして謝るんですか？　あなたはなにも謝るようなことしてないのに」
アカメはマシロの近くに歩み寄り、のぞきこむために腰を曲げた。
「ち、近いんですけど……！」
肩を押し返すマシロの手首を掴み、じっと見つめる。
「あなたを近くで見たいんです。ご迷惑ですか？」
「迷惑です！　どうしてあなたってそう突拍子もないんですか！？」
きっぱりと言い切られて、さすがのアカメもがくりと肩を落とした。
うーうーと唸りながら頭を捻るその様子が珍しく、可笑しかった。
「どうすればマシロさんの迷惑にならないで傍にいられますかねぇ」
「突然現れたり、突然パイを食べさせたり、突然顔を近づけたり、突然手首を掴んで見つめてこないでくれたら、たぶん大丈夫です」
「なら、事前にお断りすればいいですか」
「はい？」

「あなたに触りたいです」
「はあ？！」
変質者のような申し出を真顔で言われて、思わず後退り、かかとでバケツを蹴ってしまった。
「できれば抱き寄せたりしたいんですが、可能ですか」
「ふ、不可能です！！」
大きく両腕を交差してバツ印を作って見せると、アカメは寂しそうに目を伏せた。
「そうですか。やっぱり駄目なんですね」
「当たり前です！　普通見ず知らずの相手にそんなこと許しません！」
「普通、ですか。おれ今までお互いのことなんて一切知らない相手とばかり関わってきたので、こういうときに当たり前だといわれても、どういった手順を踏んでいくのかわからないんですよ。教えてくれますか」
教えてくれますかといわれても、マシロにも男女交際の経験はない。頭の中の予備知識をとっかえひっかえこねくり回しても漠然としている。答えかねて唸っていると、目の前の男は深い溜息をついた。
「あなたが嫌がることは絶対しません。おれ、そんな警戒されるほど変な男に見えますか？」
マシロはアカメを視線で上下になぞり、こくりと頷いた。
「えっ、それ本当？」
「私からしたら、アカメさんの風貌も言動も変です」
「変、ですか……」
広い肩だけではなく、せっかくの長身を丸めるように落とし、全身でうなだれた。
「や、でも、あの、今の言い方ひどかったですよね。すみません。アカメさんが悪い人ではないのは知ってます。ただ、もう少し突飛な行動を控えていただければ」

アカメのひどい落ち込みようについ絆されて歩み寄る。
「控えたら、仕事終わっておれと会ってくれます？」
右目が控えめにマシロに向けられる。マシロは二秒ほど視線を泳がせ、その右目を見返した。
「……今日、外食してくるかもしれないって母に、朝、玄関で言ってきました」
「マシロさん……、抱きしめていいですか」
「お断りします」
満面の笑顔で切り返され、広げた手のやり場を失った。
脱力して溜息混じりにマシロをみると変わらずニコニコと笑っている。
「可愛いんだか可愛くないんだかハッキリしてもらえませんかね」
「可愛くなくて結構です。それより私お給料日前なので、二人で三千還以内でいけるようなお店にしてくださいね」
「あなた、アホですか……」
キッと睨まれ、咳払いで誤魔化す。
「おれはあなたに飯代を出させる気なんてないです。あなたはおれに付き合ってくれたらいいんです」
「でも」
「おれはあなたの条件を全部飲みます。だからあなたも一つくらいおれの条件飲んでくださいよ」
「……」
「でなければ今すぐあなたをさらって人に言えないようなことしますよ？」
穏やかな笑みとは裏腹に声が低い。
「そ、そんなことしたら警邏隊呼びます」
「すみませんがそんなもの怖くもなんともないです」
マシロの表情がみるみるうちに強張り、全身が口喧嘩に負けそうな子供のように小刻みに震え出す。アカメのオーラが冗談では済まないほどの強迫観念を醸し出している。

「ご、ご飯代割り勘にするかしないかくらいの話じゃないですかぁ……」

耐え切れずに目を潤ませながら、か細い声で反論をすると一気に場の緊張感が解かれた。

「マシロさん強情っ張りだから、ちょっとおどかしただけです。言ったでしょ。あなたが嫌がることはしません。でも奢るくらい許してもらえませんかね」

マシロが小さく頷くと、アカメが視界から消えた。

「アカメさん？」

足元に正座で両手と額をつけて伏せている。

「やり過ぎました。ほんとごめんなさい。二度としません」

「……それもやり過ぎです」

下にいたかと思えばもう目線が上にある。

「じゃあ付き合ってくれますか？」

「……お食事くらいなら、全然。むしろ嬉しいです。こういうの、初めてです」

はにかむのをアカメが凝視している。

「マシロさん、だきし」

「駄目です」

きりっと牽制されて閉口する。

「じゃあ、もしこの花全部おれが買ったら仕事終わりますか」

「翌日の仕入れが大変でおかみさんが闘鶏できなくなりますね」

「ちょうどいいでしょう。あの賭け事狂い」

「ふふふ。ひどい言い様ですね。でもこんなにたくさん花があっても一人じゃ持ちきれないですよ」

「皆に配ればいいんですよ」

アカメが穏やかな表情でいうのでマシロは笑った。

「素敵ですね」

「そうですか。ならお願いします」

微笑みながらお互いの間の空気が固まった。固まったのはマシロ

の思考だ。
「……冗談、ではない、んですか……？」
「おれは常に本気ですよ」
アカメは真顔で答えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6104y/

烏と梔子。

2011年11月21日03時18分発行